

# さくらしまの

# シ酒



特別企画展入口の写真撮影コーナー

いおワールド  
かごしま水族館

特集「特別企画展ができるまで」	2.3
いるかの時間・らっここの時間	4
「イルカの赤ちゃんの名前が『ラスキー』に決まりました!!／最近のチェリー」	
ここがみどころ 「2階：南西諸島の海のコーナー『シャゴウガイ』」	5
錦江湾のなかまたち 58. 「ハセイルカ」	5
アクアラボ「黒潮大水槽のサバのなかまたち」	6
特別展示室「ミクロの世界をのぞいてみよう！～目には見えない生きものの世界～」	6
鹿児島のアユ漁	7
いおワールド通信	8

# 特別企画展ができるまで

かごしま水族館では特別企画展を年間3回開催しています。平成24年の夏には開館以来45回目となる「おじゅりもうせ種子島～黒潮が育む海の生きものたち～」を開催しました。

今回は特別企画展ができるまでの一例として、本企画展の開催までの舞台裏をご紹介します。

## 「テーマを決める」



何度も打ち合わせを重ねています

まずは企画展のテーマを決めなければなりません。テーマにはイルカやサメのように生きもの自体にスポットを当てたものや、毒や色・模様など生態にスポットを当てたもの、はたまた絵本に出てくる生きものや鹿児島の偉人篤姫にちなんだもの、そして、特定の場所にスポットを当てたものなどを選んできました。

鹿児島県は南北に600kmもあり、離島も多く、さまざまな水辺の環境があります。これまでに錦江湾、屋久島、奄美大島、そしてトカラ列島などを紹介してきましたが、平成24年の夏は本土に最も近い離島の一つでありながら、まだ紹介していない種子島をテーマにすることにしました。

## 「展示内容を検討する」

テーマが決まったら、次は内容の検討に入ります。

当然、担当スタッフは種子島を知らなければなりません。資料を集め、何度も種子島を訪れ、いろいろな方の話を聞き、何が紹介できるのか、どのようにことができるのか、何度も話し合いを重ね決定していきます。特に生きものに関してはあまり資料がなく、自分たちの力で調査を行う必要がありました。海や川で採集・観察を行い、市場やスーパーの鮮魚コーナーを見て回り、漁業者の漁に同行した結果、確認できた生きものは魚だけでも約400種になりました。



種子島(南種子町役場)を訪れ協力を依頼します

## 「展示生物・資料を集める」



生きものの収集も自分たちで行います



漁業者の漁に同行し、生きものを収集します

展示内容が決まったら、次は展示生物・資料の収集作業に入ります。

展示生物の収集では何度も種子島を訪れました。川やマングローブでは胴長をはいてタモ網をふり回し、海では釣りや、漁に同行しました。また、地元漁協や漁業の方にも収集に協力していただき、多くの生きものを集めることができました。夜が明けぬうちに出かけたり、荒れる海で船に乗ったり、大変ですがもっとも楽しい仕事の一つです。

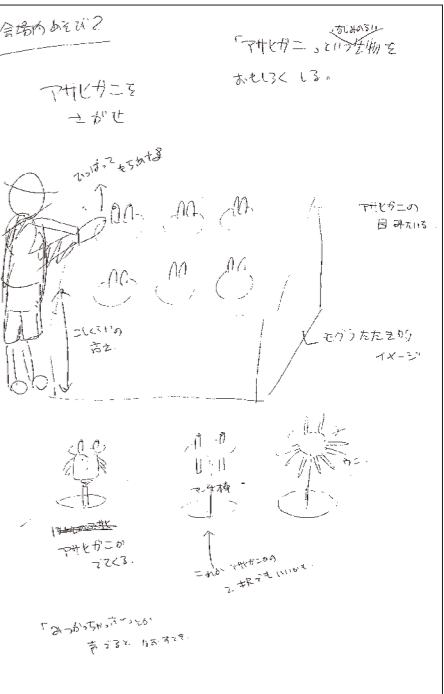
## 「会場のデザインを考える」

収集と同時進行で、会場作りを行わなければなりません。紹介したい生きもの、貴重な資料、種子島の魅力を伝えるために会場をどのように配置していくか、どんな雰囲気で紹介していくか、特別企画展の出来を左右する重要な仕事になります。



写真パネル作成中。出来るものは手作りで行います

そのため時間をかけて納得いくものができるまで何度も話し合います。会場のイメージカラーは全員一致で、種子島の海と空の「青」と決まりました。また、種子島の強烈な日差しをイメージした明るい会場にしました。生きもの以外にもたくさん紹介したい場所、人、事柄がありましたので、写真パネルをたくさん使用することにしました。そして、小さなお子さまにもゲーム感覚で学んでもらえるよう造作にも力を入れました。



砂に潜っているアサヒガニを探す  
体験コーナー案のスケッチ。  
これをベースにして何度も検討を重ね  
展示できる形に作り上げていきます

## 「いよいよ完成」

会場が完成したら、最後は展示水槽作りです。

今回は種子島の川、マングローブ、潮だまり、浅い海の生きもの、それから生きている姿はあまり見ないかもしれませんのが、種子島の特産となっているような海の生きものを展示します。水族館の特別企画展なので、種子島の水辺の環境を水槽内で再現し、そこにすむ生きものをしっかり見せることが最も重要です。

水槽内に生きものが入り、展示水槽が完成しました。同時にこれで特別企画展も完成です。ひとまずほっとしました。しかし、これから約2か月間、この特別企画展を維持していくかなければなりません。まだまだ担当者の仕事は終わらないのです。



次第に水槽も出来上がっていきます



作業は夜遅くまで続きました

このようにかごしま水族館の特別企画展は、多くの時間と労力を費やして完成します。皆さんに紹介するためには資料を読むだけではなく、実際に現地に足を運び現場を見ること、現地の人の話を聞くことを最も重要と考えています。今後もいろいろなところに出かけ、得た成果を特別企画展で紹介していきたいと思います。

(山田 守彦)

## イルカの赤ちゃんの名前が 「ラスキー」に決まりました!!



ラスキーに決まりました!

3月に誕生したハンドウイルカの赤ちゃんはすくすく成長し、1頭で泳ぐことも増え、よく遊ぶようになりました。生まれた時は120cmほどだった体長も、10月現在で200cmほどになっています。「赤ちゃんイルカ」というよりは、もうミニサイズのハンドウイルカです。そんな赤ちゃんイルカに名前をつけることになりました。

私たち職員だけでなく多くの皆さんが待ち望んでくださったイルカの誕生ということもあります。今回は、広く皆さんから募集することになりました。かごしま水族館のイルカたちは体の特徴から名前をつけていますので、赤ちゃんイルカを実際に見てもらい素敵な名前を考えさせていただきました。

館内での応募の他、ハガキ、インターネットなどでも約2週間募集しました。その結果、応募総数2006通、名前の候補も954点になりました。皆さん、それぞれ思い思いの名前を考えてくださいましたことに感謝しています。

その中で、応募総数が多かったこと、父イルカ(ラスター)と母イルカ(ミルキー)の名前にちなんでいること、響きがいいことなどから「ラスキー」に決定しました。

今のラスキーは、お母さんイルカのミルキーの他、マール、チーク、テンテンの大人のメスイルカ3頭とともに、イルカプールで過ごしています。

ラスキーと一緒にしたこと、大人のイルカたちが私たちも今まで見たことがなかった泳ぎや行動を見ることもあり、ラスキーも大人のイルカのマネをして、教えてもらいないのにジャンプしたり、尾びれをバシャバシャさせて泳いだりと、たがいに良い刺激になっているようです。



ラスキーの命名式



大人のイルカたちとも仲良く泳ぐラスキー(右から2番目)

## 最近のチエリー

オスのカイが亡くなってから早10か月。今は1頭で生活しているアラスカラッコのチエリーの近況をお伝えします。

10月で、チエリーがアラスカからかごしま水族館へやってきてから丸14年が経ちます。人間にたとえると、もう80歳を超えるほどの年齢だと推測しています。

やってきた時は全身茶色だった毛色も、今では、顔から胸にかけて、そして足のつけ根あたりまで白くなっています。歯も弱くなってきたのか、以前より時間をかけてエサを食べるようになりました。このように年齢を重ねた様子は見られますが、とても元気で、相変わらずエサの好き嫌いをしながら、マイペースに過ごしています。

日本で飼育されているラッコは、かつては100頭を超えていましたが、今では29頭(平成24年5月末現在)と激減しており、高齢化が問題となっています。チエリーも高齢ですが、いつまでも元気に過ごしてもらえるよう、しっかりと飼育をしていきます。



チエリー すっかり白い毛が多くなりました  
(H24.7.30撮影)



## 2階:南西諸島の海のコーナー 「シャゴウガイ」

2階南西諸島の海のコーナーで、かごしま水族館初展示となるシャゴウガイを展示しています。貝幅約25センチもある巨大な姿がひときわ目立ち、存在感があります。シャゴウガイは、サンゴ礁周辺の浅い海にすむ二枚貝のなかまでシャコガイ類によく似ていますが、



殻を岩に固定するための足糸がシャゴウガイにはありません。シャゴウガイは大きくなると殻を開閉して動くことができ、より陽の光があたる場所へ移動するようです。外とう膜には藻類を共生させ光合成を行い、その栄養分を体内に取り込みながら成長しています。展示水槽は、太陽の光が直接水槽に差し込む仕組みになっていますが、観察していると太陽光の一番強い時間に少しでもたくさんの光を取り入れようと殻が割れてしまいそうなほど目一杯開いています。このシャゴウガイは、与論島の寺崎海岸沖の水深約2m程の砂地で捕獲され寄贈していただきました。寄贈していただいた方の話によれば、最近では見ることが少なくなったそうです。他の魚たちに劣らない迫力を放つシャゴウガイをどうぞ、じっくり観察してみてください。

(西 陽亮)



錦江湾の  
なかまたち

## 58.ハセイルカ



ハセイルカは錦江湾で頻繁に見られるイルカの一種です。ハセイルカがよく見られるのは岸から離れた沖合が多いのですが、たまにエサの魚を追って港の中にまで入ってくることもあるようです。航行するフェリーの前をまるで先導するかのようにピョンピョンとジャンプをしながら泳ぐ姿を見かけることもあります。

ハセイルカの特徴はそのカラーリング。体の色は黒と白がくっきりと分かれています。特に体の前半分ではその特徴がよく出ています。また大きさはだいたい230cmですが、クチバシの長さは約20cmと体のわりにとても長いのも特徴です。

錦江湾内全域を探査した調査では500頭を超える数が見つかったこともあります。しかし昨年、今年と夏季に行った調査では1頭も見つけることができませんでした。もしかするとハセイルカは錦江湾から外の海に出て行ってしまっているかもしれません。もし出て行ったとすれば、どこまで行っているのでしょうか? 出て行ったハセイルカがまた錦江湾にもどってきてているのでしょうか? まだまだ謎が多いイルカです。

(広瀬 純)



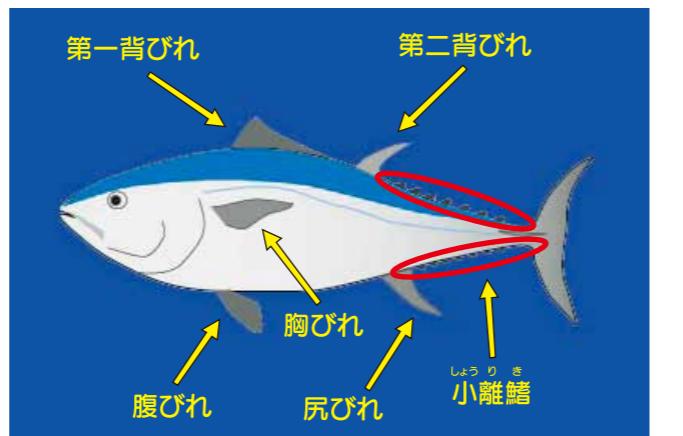
## 黒潮大水槽のサバのなかまたち

かごしま水族館の黒潮大水槽は、黒潮の流れに乗ってやってくる魚を展示しています。この水槽には、ジンベエザメ、クロマグロなど約30種類の魚が遊泳しています。

この中にサバのなかまがたくさん泳いでいることをご存じでしたか？

名前に『サバ』がつくマサバ、ゴマサバの他に実は、カツオ・クロマグロ・スマ・ハガツオの4種類がサバのなかま（サバ科）に含まれます。ほとんどの方が、『マグロがサバのなかま？』と驚かれると思います。

サバのなかまの代表的な特徴は、第二背びれと尻びれの後ろに小離鰭と呼ばれる小さなひれが並んでいること。第一背びれ・胸びれ・腹びれが水の抵抗を減らすた



め、収納される溝があることです。

左下の写真を参考にして黒潮大水槽の中を泳ぐサバのなかま4種を見分けることに挑戦してみてください。はじめは、高速で泳ぐ魚に目がついていかなくて難しいかもしませんが、粘り強く観察したら見分けることができるようになるでしょう。

見分けることができたら、クロマグロが泳ぐときのひれの動かし方に注目して観察してみましょう。背びれ、胸びれ、腹びれを器用に動かして遊泳しています。それぞれのひれには役割があります。どんな時に動かしているか？ぜひゆっくりと観察してみてください。

カツオやクロマグロの幼魚の群れは、8月のお盆過ぎから鹿児島近海にやってくることが知られており、一本釣りの漁師さんにお願いして、丁寧に釣り上げてもらいます。20~30cmほどの幼魚は、海上イクスで餌付けや傷の治療を行ってから、9月中旬頃に黒潮大水槽に搬入されます。

(大瀬 智尋)

## 特別展示室

### 情報休憩コーナー

### ミクロの世界をのぞいてみよう！ ～目には見えない生きものの世界～

平成24年10月13日(土)～12月2日(日)

みなさんは微生物を知っていますか？微生物とは目に見えないほど小さな生きものの総称です。私たちの身の回りには植物や動物、細菌などいろいろな微生物が生きていますが、とても小さいので、ふだんその存在を感じることはあまりありません。けれども花びんの水の中にも近くの池や田んぼにも、そして水族館の目の前の海にもたくさんの微生物が生きていて、それらを出発点に生きものの「食う」「食われる」の関係が成り立っています。大きなジンベエザメが海で暮らしていくのも、小さな生きものたちがいるからなのです。今年の情報休憩コーナーでは、あまり見る機会のない微生物の世界をミクロの世界と題してご紹介します。

微生物は探ってきた水を目の細かいフィルターで濾して、顕微鏡で探します。飼育の難しい生き物ですから、展示期間中は担当者が定期的に県内各地の湖や田んぼ、水族館近くの小学校の観察池などにおじゃまして、微

生物を探す予定です。みなさんの身近な場所の微生物が展示されるかもしれません。

また、今回は山口県岩国市のミクロ生物館のご協力により、微生物の貴重な映像や写真を展示するほか、講師の先生をお迎えしてプランクトンを観察したり模型を作ったりするイベントも開催する予定です。目には見えないミクロな生きものの世界をお楽しみに！（出羽 尚子）



## 鹿児島のアユ漁

多くのみなさんはアユという魚をご存知だと思います。アユの寿命が一年しかないという事はあまり知られていないと思います。

アユの一生に合わせた鹿児島県で行われている二つのアユ漁をご紹介します。

### 【建て網漁】

鹿児島県では6月1日以降、各地の川でアユ漁が解禁を迎えます。出水市の米ノ津川（広瀬川）では毎年6月の第一日曜日の午前4時に解禁を迎えます。この日を心待ちにしている参加者の多くは前日から川辺にテントを張り解禁の合図を待ちます。そして午前4時、花火の音と共にいっせいに川に入っていくのです。



建て網漁

建て網漁は川幅いっぱいに立てた金属製の棒に網をかけてアユがかかるのを待つというシンプルなものです。しかけた後は、上流から網でアユを追い込む方や、石を投げてアユを驚かせ網に誘い込もうとする方、何もせず川辺でビールを飲んでいる方など、さまざまにすごい統一性がありません。

それもそのはず、米ノ津川で漁をしている方々は漁師さんではなく、家族や会社のイベントで参加されている方ばかり。そのためそれぞれの参加者がこれまでの経験をもとに思い思いのやり方で漁を行っています。

獲れたアユはその場で塩焼きや、背ごし（ぶつ切りにして酢みそで和えたもの）にして食べられており、獲れたての旬の味覚を味わう様子は漁業というよりお祭りのようでした。



背ごし



建て網にかかったアユ



やな漁(全体)

### 【やな漁】

薩摩川内市を流れる川内川で行われている“やな漁”は秋から冬にかけて、アユが産卵のために川を下る事を利用した漁法です。その方法はまず川に設置するV字型の壁（やな）を作る事から始まります。やなの大きさは川幅により異なりますが、川内川に設置されているものは全長200mもあります。このやなは竹で作られており、8月から漁師さんが手作りで作成し、9月に設置し、それから12月まで漁が行なわれます。



やな漁(カゴ)

漁師さんは毎朝6時頃には川にやってきて準備をはじめます。日も昇り辽りが明るくなるころ、やなの一番狭くなっている場所に取り付けてあるカゴをはずすため川の中を歩いて進んでいきます。カゴを取り外し、ひっくり返す時は緊張の瞬間です。カゴからアユがたくさん出てきたのを見るとほっとして、思わず笑顔になってしましました。

この時期のアユは産卵のために河口に向かう成熟したアユです。そのため、やな漁では産卵に向かうアユを全て漁獲しないように川幅の約2割はやなを設置せずに魚の通り道「魚道」としてあけておきます。

このような取り組みが次の年のアユ漁へつながっていくのです。

※アユ漁には遊漁証が必要です。河川によって購入方法等が異なりますので、詳しくは河川を管轄する漁業協同組合にお問い合わせください。

(中村 政之)

# いおワールド 通信

## シイラにエサやり体験

夏休み中に実施した「シイラにエサやり体験」には多くのお客様に参加していただきました。太陽光の元でエメラルドグリーンに輝く約70尾のシイラの群れは、食欲も旺盛です。参加者がエサを投げ込むと、一斉に飛び跳ねながら勢いよく食べに来るため、子供たちだけでなく大人の方からも歓声が上がり、大好評のうちに終えることができました。

(西田 和記)



### 共通チケット

#### ●お得な共通チケットのご案内●

##### 平川動物公園・かごしま水族館共通チケット

通常料金(平川動物公園+水族館)

大人2,000円⇒1,600円

小人 850円⇒ 770円



##### 仙巖園・かごしま水族館共通チケット

通常料金(仙巖園+水族館)

大人2,500円⇒1,800円

小人1,250円⇒ 900円



##### 知覧特攻平和会館・かごしま水族館共通チケット

通常料金(特攻平和会館+水族館)

大人2,000円⇒1,600円

小人1,050円⇒ 840円



4月1日より鹿児島市平川動物公園との共通チケットを発売しました。

大自然を体感しながら生きものたちの生態を学んだり触れ合ったりできる動物園と水族館の両施設を割引料金で利用できるお得なチケットです。その他にも薩摩藩島津氏の別邸として有名な仙巖園との共通チケットや知覧特攻平和会館との共通チケットなども販売しております。水族館を利用する際は、お得に楽しむことのできる共通チケットを利用してみてはいかがでしょうか?

(谷口 哲也)

### ボランティアから

ボランティア学習会で、前鹿児島大学総合研究博物館館長、大木公彦先生の講義を受講しました。[国立公園・錦江湾の自然]というテーマでしたが、地形や地質の成り立ち、火山活動が与える影響など幅広く教えていただきました。

また、錦江湾の海洋生物が豊富な理由は、黒潮の流入によるものだけで



なく、火山の影響も有ることがわかりました。湾内には世界に3ヶ所しかない酸性水塊があることから、地球温暖化のモニターにも役立つことなど、錦江湾は貴重で素晴らしい海であることを改めて知ることができ、非常に意義深い学習会でした。

(榮野 和之)

### 編集後記

猛暑の象徴クマ蝉と、夏の終わりを告げる法師蝉、二つの鳴き声が入り混じった東の間の“競演”も次第に遠のき、それに比例するように子どもたちの歓声も治まり、9月の館内は平常を取り戻したようです。夏の疲れが出る頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

子どもたちは無事宿題を提出できたでしょうか。自由研究や調べ学習に関する宿題も、夏休みが終わりに近づくにつれ、問い合わせが水族館に殺到します。それも子ども本人より母親からのメールによることが少なくありません。水族館は人工の建物ではありますが水の中には実物が溢れています。静かにゆっくり流れる時間の中で、生きものたちが目の前を通り過ぎます。どうか 性急に答えを求めるでください。水槽に近づき、ガラス越しの生きものに目を凝らし、その息吹を感じとってほしいと願っています。

(荻野)

